The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	畑田耕一名誉教授に聞く : 大阪大学の思い出を中心に (1)
Author(s)	菅, 真城; 阿部, 武司
Citation	大阪大学経済学. 2014, 64(1), p. 65-80
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56996
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【資料】

畑田耕一[†]名誉教授に聞く

― 大阪大学の思い出を中心に ―（1）

菅　　真 城[‡]・阿 部 武 司[‡‡]

2013 年 9 月 26 日
於　大阪大学法経大学院総合研究棟（大阪府豊中市）

1. 戦争の体験

阿部　本日は，畑田耕一先生のお話を伺います。

先生は 1941 年（昭和 16 年）4 月に大阪府南河内郡丹比村（たんぴむら）の国民学校にお入りになります。その年の 12 月に太平洋戦争が始まり，戦時中には国民学校での生活を送っておられます。この頃のご体験で印象に残っている事柄がおありでしたらお話しいただきたく思います。

畑田　私は，今お話しいただいたように，大阪府南河内郡丹比村郡戸（こうず）という所に生まれました。父は私が物心ついたころから戦争が終わるまで，ずっと兵役に服していました。最初は中国で高射砲隊に属していました。私や母にとって幸いだったのは，大東亜戦争が始まった時に内地勤務になりまして，それから終戦までは内地勤務だったことです。

1945 年に戦争が終わり，父の復員と同時に農地改革が始まりまして，私の家はずっと庄屋（地主）で，自分のところで作っていた自作の田んぼもありましたが，大部分は小作に出しており，それがそのまま全部，実際に田を作ってくれていた人のところに行って，われわれの家には 6 反だけが残ることとなりました。それを何とかして守らなければならないということで，父はかなり無理をしたのだろうと思いますが，55 歳で肝臓がんで亡くなりました。

それから母親も，これはだいぶ後になってからですが，やはり 55 歳で乳がんで亡くなりました。そういうことで，私は割合早くから，いろいろなことの責任を持たざるを得ない立場になったわけです。

今，阿部先生が言われたように，1941 年 3 月までは丹比小学校だったのが，4 月に丹比国民学校という名前に変わり，そこに入学いたしまして，1 年生，2 年生の時は，女子高等師範学校，いわゆる女高師を出られた女の先生に担任していただきました。最初は城戸先生という方だったのですが，この先生は子どもができてお辞めになり，谷口先生という先生に，1 年の半ばから 2 年生まで担任をしていただきました。

このころは，まだ女の先生方は袴かスカートを履いておられました。担任は 2 年に 1 回替わるので，3 年，4 年は田中澄江先生という女の先生が担任でした。このころには男の先生はほ

† 大阪大学名誉教授
‡ 大阪大学アーカイブズ准教授
‡‡ 大阪大学名誉教授，国士舘大学政経学部教授

とんど兵隊に取られまして，先生の大部分は女で，男の先生は大向栄一校長先生と体操の西田先生のお二人になっていたと思います。

そうすると，先生が足りませんので，正規の免許をお持ちではない旧制の高等女学校を出られた先生がどんどん赴任してこられるという状況で，私の田中先生も確か代用教員といいますか，そういう資格の方だったと思います。

阿部先生，「もんぺ」ってご存じですか。

阿部　はい。写真などで見る程度ですが。

畑田　これはズボンではなくて，ゆったりした女性用のズボンの裾をを絞ったようなもので，その着用が戦争中は女性に半ば強制されていました。女の先生は全部それを履いておられて，スカートというのはめったになかったですね。

田中澄江先生は非常に優しい先生で，当時，鬼畜米英とかいう言葉がありましたが，あれを学校で聞いた覚えは１回しかありません。それは１年生の時に谷口先生が黒板に書かれた時だけです。田中先生からは，この鬼畜米英というような話とか，大きくなったら戦争に行って戦えなどという話は，あまり聞いた覚えがありません。

それよりむしろ，夜，学校に誰かが宿直されるわけですが，男の先生が出征で少なくなってくると女の先生が宿直をやらざるを得なくなってきました。女の先生の場合は１人では不安ですから，２人で宿直されるのですが，自分の担任の先生が宿直の夜に，われわれはよく学校へ夜に遊びに行きました。その時に授業とはまったく違ういろいろなお話を聞くことが出来ました。これは非常に楽しかったのを覚えています。

そのころのことで私が一番印象に残っているのは，月に１回，校長先生が「教育勅語」を，恭しく白い手袋をはめて，戦争中に白い手袋を指せるのは，この時だけではなかったかと思うのですが，教頭先生が恭しく持ってこられる「教育勅語」を，桐の箱から取り出して，ぱっと開いてお読みになる。これは月に１回，必ずお読みになりました。

「教育勅語」というのは，教育の根本原理を書いてあるわけですから，今で言うと，たぶん教育基本法に当たるのだろうと思いますが，「朕惟フニ」に始まる文章で，最初と最後のほうは小学生には非常に難しい文章ですが，その真ん中の部分には教育の基本がきっちり書いてありまして，小学校４年生にもなれば，辞書を引けば，ほぼ理解することが出来ました。

これを読みますと「爾臣民　父母ニ孝ニ　兄弟ニ友ニ　夫婦相和シ　朋友相信シ　恭儉己レヲ持シ　博愛衆ニ及ホシ　學ヲ修メ　業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ　德器ヲ成就シ　進テ公益ヲ廣メ　世務ヲ開キ　常ニ國憲ヲ重シ　國法ニ遵ヒ　一旦緩急アレハ　義勇公ニ奉シ　以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」と書いてあります。「爾臣民」という言葉は今の皆さまにはお分かりにならないかもしれませんが，今で言うと国民のことです。これは今，インターネットには読み方もきちんと出ておりますし，「教育勅語」の日本語訳というのも出ておりまして，友達とお互いに信じ合い仲良くしなさいよぐらいのところまでは，今の方でも分かっていただけると思うのですが，後のほうの意味は，行動は慎み深くする，それから他人に博愛の手を差し伸べる，学問を修める，仕事を習う，これはそのころで言えば手に職をつけろという意味ですね。それによって知能をさらに開発して，徳と才能を磨き上げて，進んで公共の利益や世間の務めに尽力し，いつも憲法を重んじ，法律に従いなさいと言っているのですから，非常にいいことを言っていると私は思うのですが，阿部先生，どう思われますか。

阿部　はい。そう思います。

畑田　私がここで申し上げておきたいことは，最近，教育はどうあるべきかについては，皆さんよく意見を言われるのですが，大学の学生をはじめとして，学生や生徒，すなわち教育を受

ける立場の者に「君らはどういう目標で教育されているのか」ということを，理解させる努力を怠っているような気がして仕方がないのです。

この「教育勅語」を月に1回，校長が生徒に向かって読まれるということは，その努力をしておられたというふうに私には思えるのです。4年生になった時に，急に「今日は『教育勅語』を覚える日にする」と言われまして，確か午後の授業は止めて，今から全員覚えろというわけです。それで，丸暗記ができた者から，先生の前に立って言いました。

毎月聞いていますから1年間に12回聞くわけで，私はそれを4年まで聞いていたわけですから，割合簡単に暗唱ができたのですが，絶対に覚えて帰らなければならないということになって，なかなか覚えられない者は，ついに廊下に立たされて，夕刻まで一所懸命に覚えていたという記憶があります。

ただ，小学生に，今の「教育基本法」を覚えろというと，かなり大変ではないかと思います。いいことが書いてあるのですが，ずいぶん長いのです。

「我々日本国民は，たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに，世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。

我々は，この理想を実現するため，個人の尊厳を重んじ，真理と正義を希求し，公共の精神を尊び，豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに，伝統を継承し，新しい文化の創造を目指す教育を推進する。

ここに，我々は，日本国憲法の精神にのっとり，我が国の未来を切り拓く教育の基本を確立し，その振興を図るため，この法律を制定する」と。これは教育の目的です。

第一条には，「人格の完成を目指し，平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」と書いてあります。非常に立派な文章なのですが，こういうことを常に考えている人は別として，すっと頭には入りにくい。

第二条には，「教育は，その目的を実現するため，学問の自由を尊重しつつ，次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一　幅広い知識と教養を身に付け，真理を求める態度を養い，豊かな情操と道徳心を培うとともに，健やかな身体を養うこと。

二　個人の価値を尊重して，その能力を伸ばし，創造性を培い，自主及び自律の精神を養うとともに，職業及び生活との関連を重視し，勤労を重んずる態度を養うこと。

三　正義と責任，男女の平等，自他の敬愛と協力を重んずるとともに，公共の精神に基づき，主体的に社会の形成に参画し，その発展に寄与する態度を養うこと。

四　生命を尊び，自然を大切にし，環境の保全に寄与する態度を養うこと。

五　伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」とあります。

これも非常にいいことが書いてあると私は思いますが，少し雑然としているようなところがあって，改正前の「教育基本法」のほうが，むしろ「教育勅語」のように上手にまとめてあったような気がします。

いずれにしても，これでは先ほども言いましたように，生徒にもよく理解させるというのは少し難しいのかなと思うのです。「教育勅語」はその点は，非常にうまくまとめてあったなという気が私はしているのです。小学校，中学校版の「教育基本法」の要旨みたいなものを作って，それを生徒に覚えさせるようなことをやってみようかなという気が，私はかなり強くしております。

「教育勅語」の話はこれぐらいにしまして，

私は1945年8月15日の終戦の時は，小学校の5年生だったのです。その少し前に今でも非常に強く印象に残っていることが起こりました。皆さんに，「兵隊さんが運動不足になる」というと変だなと思われるかもしれませんが，海軍の兵隊さんというのは狭い船に乗っていますので，割合運動不足になるのです。それでは困りますから，戦争をしていない時に，海軍の兵隊さんがやる体操というのが特別にあったのです。それを小学生にやらせたらよいのではないかと考えた人があって，これを小学校では海軍体操と言ったのですが，その海軍体操をわれわれは一所懸命にやらされました。特に，私どもの校長先生の大向栄一先生は，日本は何があっても大和魂で勝つという方でしたから，海軍体操を一所懸命に指導されました。

それで，非常に上手になって校長先生が喜ばれて，周りの小学校の先生を集めて，参観授業でみんなに見てもらおうということになりました。戦争の終わる2カ月ほど前の6月，梅雨のさなかにそういうことを企画されたのですが，当日はすごい雨でした。それで，朝，伝令が来まして，今日は絶対に傘を差してきてはいけない，はだしで来いというのです。何故，はだしかというと，当時，雨の日に小学生が履くものは高下駄しかなかったのです。長靴なんていうものは，日本にはゴムがないですから全然ない。下駄みたいなものを履いてこられたら困るわけで，はだしで来いというわけです。

それで，参観をしておられる先生方は傘をさしておられましたが，われわれは傘をさして体操はできませんから，ずぶ濡れになりながら体操をやったわけです。体操が終わって最後に，陸軍の中尉さんが講評をされました。これは当時，人がたくさん集まると，必ず軍隊から誰かが来るのです。不穏な集会をやらないかというチェックのためですね。

それで，来ておられた陸軍の中尉さんが檀に上がられて，「君たちは今日，非常に上手に体操をやった。私は大変心強く思った」と。ここまではありきたりの挨拶ですが，「しかし」と言われたんです。「しかし，戦争はわしら兵隊がやる」と。この中尉さんは，僕らがやった体操がなんたる体操か知っておられるわけですからね。「君たちは小学校の生徒だ。体操もいいけれども，勉強も一所懸命にやってくれよ」と。この中尉さんは我々がやった体操は勉強の一つとは考えていなかったんです。そして，「それは戦争が終わった後の世界の平和のためだ」と結ばれたのです。

これは小学生に言うにしては実に重いことを言われたと後になって思いました。私は体操はものすごく下手なんです。運動神経は非常に鈍くて，体操は好きではなかったので，この兵隊さんは体操をもっと一所懸命にやれと言うかと思ったら，体操もいいけれど勉強しろと言われて，その時は非常にうれしかった。

それで，その「世界の平和のために勉強する」というのが，一体どういう意味かということは，その時はあまりよく分かっていなかったが，忘れることはなかったのです。それどころか，この言葉は私の中で年とともに重みを増していきました。相手が小学生の場合には，レベルが高過ぎると思うことでも，言うだけは言っておくというのは大事なことだなと，今つくづく思うのです。

その当時の私の周りの環境をお話ししますと，大向校長先生は，先ほど言いましたように，とにかく神風を吹かせてでも日本は勝つというタイプの方だったのです。おやじの親戚にはいろいろな人がおりまして，畑田保次というのは僕の祖父の弟で，彼はよくけんかをするのですが，最初の仕事は新聞社に勤めていまして，そこのニューヨーク特派員をかなり長くやっていたんです。ですから，アメリカがどんな国か，よく知っているわけです。当時は，その新聞社を辞めて，大鉄中学という旧制中学校の先生をしていたのですが，教壇から生徒に向

かって「あんな国と日本が戦争して勝てるはずはない」と言っていました。周りの先生ははらはらしながら，一所懸命に守ってくれていたわけです。

それから，母方の伯父，彼は城憲三と言いまして，大阪大学の工学部の精密工学の教授だったのですが，彼が作った真空管式のコンピューターは今，大阪大学総合学術博物館にありますね。それを苦労して作った男ですが，戦争中は精密工学の教授ですから，時々，アメリカの飛行機が落ちると，それの調査に行かされるわけです。B29みたいな大きな爆撃機でも落ちる時は落ちますからね。それを見て，これほどの技術を持っている国と，今の日本が戦争をして勝つはずはないと。それを，あちこちで言っていたのです。

そういう環境にいましたから，私の母も，もちろん身内の人間の言うことを信じていましたし，私は小学生でも戦争の状況を新聞などで見ていますと，日本は間違いなしに勝つなんていうことは，神風が毎日吹いたら別ですが，そうでなければ日本が勝つことはあり得ないというふうにだんだんと思うようになっていました。

それで，先ほどの「世界の平和のために勉強しろ」という話を聞いた校長先生は，何ということをいう兵隊さんだとえらく怒っておられました。当時，校長先生は村の有力者というか，そんなところの家へは時々来られるわけで，うちの家にもよく来られたのですが，来られる毎に母親と言い合いをしていましたね。「こんな戦争は早くやめなければいけない」と母親が言って，「そんなことはない。絶対にこれに勝って日本は大きく世界を制覇する」と校長が言って，どちらも譲りませんでした。

私はそんな中にいましたから，8月15日に，今日は非常に重大な放送があるから，皆，ラジオの前に正座して聞けと言われて，あの「朕深ク　世界ノ大勢ト　帝國ノ現状トニ鑑ミ　非常ノ措置ヲ以テ　時局ヲ収拾セムト欲シ　茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク　朕ハ　帝國政府ヲシテ米英支蘇　四國ニ對シ　其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨　通告セシメタリ」に始まる勅語を聞いたとき，その意味はよく分かりました。あれを聞いて何のことかさっぱり分からなかったという人がたくさんいたのですが，あれを聞いて私は，これは負けたということが非常によく分かりました。もちろん，その後ですぐにアナウンサーが解説をしたのですが，そこまで聞かずに天皇のお話だけ聞いて終わった人は，天皇は一所懸命もっと頑張れと言ったのであろうと誤解した人もいたようです。

ただ，私は終戦の詔勅を聞いて，戦争に負けて悔しいな，残念だなという気持ちよりも，一番最初に思ったのは，これでもう戦争は終わったというほっとした気持ちが強かったです。これから毎日，空襲におびえることもないという気持ちが一番強かったですね。これは非常に申し訳ない考えかもしれませんが，本当にほっとしました。おそらく天皇も，後に続くいばらの道を思いつつも，とにかくほっとしておられたのではないかなという気が私はするのです。

小学校1年生から4年生まで戦争の中で過ごしたといっても，私は田舎住まいですから，飛行機が飛んできて爆弾を落とすというようなことはほとんどなかったんです。それで，先ほどの鬼畜米英というような思いが頭の中にほとんどなかったのは，先生が言われなかったということもありますが，そういうことを思う必要もなかったのです。

ただ，大阪市は，最後の2年ぐらいは，しょっちゅう焼夷弾攻撃を受けていたわけです。うちは大阪の南の方ですから，夜，空襲警報が出るごとに，その大阪市が爆撃されているのが見えるのです。これは，まさに花火のような，花火大会を見ているようなものです。

大型爆撃機のB29が高いところを飛んでいくんです。こちらはほとんど何もできないのですが，高射砲が少々ある。その高射砲が時々打

ち上げる弾は，B29よりもはるか下の方で破裂してしまう。高射砲の弾丸というのは，打ち上げただけで放っておいたら，そのまま自分のところに落ちてくるので，爆弾が落ちたのと同じことになる。だから，飛行機が飛んでくると，ぱっと飛行機の高度を測量して，打ち上げた弾丸が飛行機のごく近くに行った時に破裂するような仕掛けをしたうえで打ち上げるのです。

しかし，その時の日本には既にその仕掛けをB29の高度までとどくように調節する材料がなかったようです。それで，高射砲の弾はB29のはるか下で爆発してしまう。それが，またみんなに見えているわけですから，日本の実力の無さを国民に公開しているようなものです。あれを見ていて日本が勝つと思った人は多分いなかったと思います。

そんな状況でしたが，戦争で日本の国がどれだけやられたのかということは，その時分，大阪市に出かけていくようなことはほとんどできませんから，戦争が終わってから大阪市に出て行って，えらくひどいことになったものだなというのを思い知ったような状況です。

阿部先生はご存じのように，今，大阪科学館というのが昔の大阪大学理学部の跡地にできていますが，あれはもともと四ツ橋に電気科学館という名前であったんです。ここだけは，なぜか焼け残っていました。そこにプラネタリウムがありまして，それを使って，確か高城武夫さんという非常に語り口の上手な方が，日に何回かその季節の天空のお話をしてくださるわけです。それにおやじが時々連れて行ってくれて，その時に今の大阪市の状況がよく見られたのです。

そういうことで，そのころから私は，ひょっとしたら大阪大学の理学部に何か縁があったのかもしれませんね。これが，私が小学校に入ってから戦争が終わるまでの話です。

2. 理工系への興味の萌芽

阿部　どうもありがとうございます。その後，大阪大学に入学されるまでのことで印象に残っていることがおありでしたら，よろしくお願いいたします。

畑田　私は生まれた時から，どういう経緯で理工系の分野に進むことになったのかというお話ですね。最初，日本とアメリカというのは遠い国という感じだったのですが，戦争の末期になりますと，日本中がアメリカの軍艦に囲まれているような状況になりました。それに関して，私は戦争中に，先ほどお話しするのを忘れましたが，1回だけ，鬼畜米英という感じがしたことがあります。

それは学校から帰りに，何か飛行機の音がして，あまり聞き慣れない音だなと思って，ふっと後ろを向いたら，アメリカのグラマンという艦載戦闘機が迫っており，操縦士の顔が見えたんです。飛行帽をかぶっていると，まさにこれは鬼みたいに見えるわけです。それで，そんなときはどうするかというのは教えられていまして，ちょうど田んぼの土手の所にいたので，ばっと土手に伏せたのです。そうしたら，バリバリっと機銃照射されまして，伏せる時は手の指ををこうして開きますが，この指の間を弾が通ったんです。もう少しそれていたら，私は右手の指が無くなっていたでしょう。その時だけですね，鬼畜米英という感じがしたのは。

艦載機が時々田舎まで迷い込んでくるほど，日本はアメリカの軍艦に囲まれていたのです。その影響は，何も艦載機だけではなくて，ボイス・オブ・アメリカ（VOA），あれが軍艦から発信されていたのです。それは，日本の大本営発表のように嘘ではなくて本当のことを言うわけですから，それを聞かれると政府は大変困るわけです。

それで，アメリカのVOAの放送が始まると，レコードを逆さまに回すと変な音がしますが，あれと同じような妨害放送の電波をかなり広い

範囲に出すのです。それをやられますと，こちらは日本の放送，ニュースや空襲警報などが聞けない。それは困りますから，今でいう高周波一段増幅に相当する回路を付加して，日本の放送だけを取り出すという工夫をやらざるを得ないのです。

うちは，もちろんおやじが，兵隊に行っていて，家におりませんでしたから，そんな仕事は私の仕事になるわけです。小学生のころからそういうことをやっていたわけです。

それから，戦争末期には電気が足りなくなって，しょっちゅう停電しました。ラジオを聞くためには電気が要ります。今だったら，電気が切れたら，どうやってラジオを聞かれますか。

阿部　今ですと電池がございますね。

畑田　そうでしょう。今の方はそう思われると思うのですが，電池なんていうものは，兵隊が外で仕事をする時に使う貴重な電源です。電線を引いて戦争はできませんからね。一般の国民が電池を使うなど，全く考えられない時代でした。

そうすると，電気なしで放送を聞く必要があるわけです。そのために，これはご存じでしょうか。鉱石ラジオというのがある。あれを自分で作って聞くしかないんです。それは皆，私の仕事になります。だから，理工系という考え方よりも，いわゆるサイエンスにある程度関係したようなことは，うちの家では全て私の担当になっていたわけです。

私を理工系に向かわせてくれたもう一つの切っ掛けは，私のおやじは長男で，兄弟が4人いて男3人なのですが，おやじのすぐ下の弟，安夫叔父が作ってくれました。彼は目が非常に悪くて兵役には合格しなかったのです。そんなことで，当時，東洋紡に勤めていたのですが，彼が日曜日に時々うちへ来るわけです。うちへ来る理由の一つは，叔父は街に住んでいましたので食べるものが不足している，それで，日曜日だけでも田舎に行けば，飯がたらふく食べられるということでした。

その時に，叔父は必ず本を1冊持ってきて，僕にくれるわけです。それがほとんど全て，子どものための科学の本でした。当時，田舎ではほとんど本が買えませんから，私はそれをむさぼるように読みました。これが私に理工系に興味を持たせてくれた大きな切っ掛けです。

これらの本は非常に有効に使われました。その叔父は子どもが2人おりましたので，私のいとこですが，彼らがだんだん大きくなってくると，歩いて1時間ぐらいの距離だったので，うちの家に遊びに来て，その本を読んでは，少しずつ持って帰るわけです。それをまたその弟が読むという具合で，非常にうまく循環しまして，この3人は全部理工医系に進みました。私は一人息子だったので，彼らが遊びに来てくれることは大変ありがたかったのです。

小学生のころにどんな本を読むかというのは，能力の開発という観点からも非常に大事なことだと思います。小学校の頃から受験のことやどんな学校，大学に入ろうかということだけに気を取られて，自分の本来歩むべき道を見失うようなことだけはしてほしくないですね。

戦争が終わって，無事でおられた方はどんどん復員してこられました。私の小学校には松本一郎先生と辻先生という二人の非常に優秀な先生が来られました。お二人は陸軍士官学校に行っておられたのだと思います。私は戦争が終わるまでは田中澄江先生に5年生も担任していただいていたのですが，うちの小学校は5年と6年は男性教員が担任するということに昔からなっていましたので，松本一郎先生が替わられました。

戦後しばらくは，新しい教科書は間に合わず，戦争中の教科書の都合の悪いところに墨を塗って読めなくして使いました。公民（戦争中の修身）や国語の教科書は墨だらけになっていましたが，理科や算数の教科書はあまり墨を塗るところはありませんでした。

松本先生は理系の出身の方で，理科の学習というのは，ただ教科書に載っていることを頭に入れるだけではなくて，実験をして授業で得た知識を確かめることが必要であるとよく言われました。例えば，アサガオの赤い花を絞ると赤い汁が出ます。それに灰汁を入れると青くなります。青い花の汁に酢を入れると赤くなります。そんな実験を含めて，いろいろな実験をやらせていただきました。

実験は，ただ面白いと楽しむだけではなくて，やったことを正確に記録して，それがなぜかということも考えて報告書を作るものだということ，これは小学生に対してはかなり難しい要求ですが，そういうことをわれわれは松本先生から教わりました。それで，私は理科系に進むということが，だんだんと私の中では固まっていったという気がします。

小学校が終わって中学校に進むころには，制度としては新制中学校ができていました。戦争中は，中学（旧制）というのは，ごく一部の人しか行かず，大部分は小学校の高等科へ行ったわけです。それが全員中学校にいくようになったのです。戦争に負けてすぐの状況下で，十分な建物が建てられない。ですから，公立の中学校というのは，校舎はどこかに間借り，教科書もなかなか揃わないという状況でした。

そんな状況では，いくらなんでも勉強できないということになって，親がみんなで相談して，私は先ほど言いました畑田保次のいた私立の大鉄中学に進学することになりました。この学校は，電車の駅，四つぐらいのごく近くにあったのです。

この大鉄中学というのは，今の阪南大学の附属の中学校です。当時は大鉄工業という戦争中からあった工業中学で，ベテランの先生が揃っておられました。年配の先生が多くて，兵役にとられることが少なかったようです。

校長の少路竹一先生は立派な人格者でした。教育は非常に熱心にやっていただきました。私の担任は河野計男先生，計算の「計」に男なので，まさに数学をやるために生まれてきたような人間だと自分で言っておられたのですが，その河野先生に数学と幾何を教わりました。

この頃は，先生がこの生徒はいけるなと思えば，いくらでも難しいことを教えたりするのです。僕は中学校で高等学校の２年ぐらいの数学までやったような気がします。高校の先生が，「おまえ，なんでそんなに幾何ができるんだ」とびっくりしておられましたが，できるのではなくて，中学校でやっていたからできただけの話なのですが。

この河野先生は理科の授業も時々されて，英語も教えていただいたし，いろいろなことを教えていただきました。速記もです。これは速記クラブというのを作って，速記の練習もかなりやりました。このごろは録音機を手軽に使えるので速記はあまり使いませんが，昔はよく使ったものです。

もう一人，非常に印象に残っているのが社会の衛藤重孝先生です。この先生は柔道３段なのです。それはよろしいのですが，少し生徒が悪いことをすると，すぐ投げ飛ばされるのです。生徒のほうは柔道はやっていませんので，投げられるとドンと腰板に当たるわけです。それで，うちのクラスの教室はしょっちゅう羽目板に穴が開いていました。

これは戦争中の怒り方を，そのまま戦後もやっておられたということですが，あまり度が過ぎて，何人かの親が校長に抗議をされて，ある時，突然辞められました。「昨日，校長に呼ばれて，おまえ辞めてくれと言われた。わしは辞めねばならん理由がはっきり分からんけれども，校長が言うから辞める」と，我々生徒に言って辞められたのです。生徒のことを思ってやっているのにというお気持ちのように思いました。

この衛藤先生には憲法を教えていただきました。その授業の方法が少し変わっていまして，

教室に入ってくると，すぐ黒板に向かって憲法の大事だと思われるところをお書きになるのです。全部書き終わったら，これを写せと言われます。生徒が写し終わるのを待って，少し説明を加えられる。それから，また次に行くのです。

それで，その黒板に書かれたものは，必ず生徒が覚えなければならない。次の時間に暗唱させられるのです。これも先ほどの「教育勅語」の暗記みたいなものですが，それで私は憲法の9条とか11条，12条，26条，27条あたりを覚えたわけです。これは，理科でよくやっている「分子とは原子で作られているもの」とか「原子とは分子を作るもの」などというような，試験に通るための丸暗記とは違って，非常に役に立ったような気がします。根本原理の丸暗記と試験のための丸暗記は全然違うのです。

それから，体操の渡辺先生という先生がおられまして，この方は非常に穏やかな先生だったのですが，私は第1節で述べましたように体操は非常に下手ですから，1年生の1学期の成績は甲乙丙丁の「丙」だったのです。ところが2学期には突然，「甲」になったんです。担任の河野先生がびっくりして，「畑田君の成績は間違いと違いますか」と聞きに行かれた。そうしたら，渡辺先生が「あいつは体操は非常に下手だが統率力がある」と。それで「甲」にしたというわけです。それ以来，中学校ではずっと「優」でした。

不思議なことに，高等学校に入った時，また最初の学期は「良」の下ぐらいの成績だったのが，2学期から「優」になりました。私，体操は何をやってもあまり良くできないのですが，成績だけはいつも「優」なんです。高等学校の先生に，なぜ私が「優」かと聞きにいったら，何といわれたでしょうか。

府立高校への入学は，大阪府の統一試験の結果で判定されたのですが，本来の公立中学の教科書が出来たのは3年の3学期の初めです。それから高校入試の間に，それをさあっと読んで試験を受けたわけです。そういう時代でした。誰も文句も言いませんでした。

高等学校は富田林高校です。元阪大総長の岸本忠三さんは私の4年下の卒業生です。なぜ富田林高校に行ったかと言いますと，学区制では天王寺高校にも行けたのですが，「天王寺高校は非常にスポーツと体操を重視する。おまえはあそこへ行ったらあかん」と言われまして，富田林高校に決めたのです。

私は体操と音楽，英語，これは何とかしたいと思うけれど，なかなかうまくいかない。英語などは英会話クラブに入ったり，音楽も合唱団に入ったりして努力はしましたが，何ともならないですね。やはり能力というのは，頑張れば何とかなるというものではないようです。

それから，この富田林高校というのは，その当時から50mプールがあって，体操の単位を取るにはそれを泳ぎ切らないといけないんです。ところが飛び込み用のプールがないので，50mプールの真ん中から突然深くなるんです。そこであっぷあっぷしたらどうしようかと思って，非常に恐ろしい。そんなことで50mをなかなか泳げなかったということもありました。

高等学校の数学は中町先生，非常に熱心に教えていただきました。理科の守屋先生は化学と物理を教えていただいたのですが，戦争中，富田林高校のそばに陸軍幼年学校がありまして，戦争が終わった時，そこの物理と化学の実験室にあったいろいろな薬品・装置を全部，富田林高校が頂いたんです。そういうことで，理科の準備室には，当時の高校としては考えられないほど多くの実験装置や薬品がそろっていまして，それは科学部に入りますと自由に使えたので，それを使って，ずいぶんいろいろな実験をしました。

当時，エックス線発生装置を使って体の骨を見たりしていました。危ないことをやっていたなと今にして思います。そんなことで私は将来

は理科と決めていましたが，物理の授業はどうも分かりにくい，理解し難いということで，化学にしたんです。消去法ともいえますが。

それでもう一つ，受け持ちの先生が仲尾才彦さんと言って，国語の先生だったのですが，ある時，仲尾先生とお話ししていたら，私の書いたレポートか試験の答案か何かを見ながら，仲尾先生が感に堪えないような口ぶりで「畑田君，君はやっぱり理系の人間だね」と言われたんです。これで私は，「おまえはもう理系に行くしかないな」と言われたように思いまして，この時にはっきり理工系に行くということを決めたんですね。この先生のこの言葉が，一番私には強く効いたのかもしれません。

3. 大阪大学理学部に進学―入学から卒業まで―

阿部　先生は1953年（昭和28年）に大阪大学理学部に入学され1957年に卒業しておられます。当時は新制大学が1949年に発足して間もないころだと思いますが，学生の目からご覧になりまして，当時の大阪大学，特に理学部はどのような状況だったのでしょうか。

畑田　いろいろなことがありますが，先ず，私は入学試験の割合直前まで，工学部の応用化学と決めていたんです。ところが，それを先ほどの城憲三に言いましたら，「おまえは絶対に理学部だ」と言うんです。私はそれがなぜか，あまりはっきり分からなかったのですが，伯父があまり強くいうものですから，理学部に変えたんです。

ただ，理学部に入って何年かしてみましたら，やっぱり自分は工学部に行かずに理学部で良かったなと思いました。今はつくづくこの伯父の言葉はありがたかったなと思っています。

「自分の進路は自分で決めろ」とよく言われます。それはそのとおりなのですが，これは自分で責任を持てということであって，自分のことは自分が全部分かっていると思うのは，大きな思い上がりだと私は思います。先ほどの仲尾先生にしろ，この城憲三にしろ，私をじっくり見ていて，言われたことだと思うのです。この時は，この伯父の意見をあまりよく分からないままに聞いたことが良かったのです。これは，若い人たちに言っておいてあげていいことの一つかなという気がしています。

理学部に入った時は，理学部に入ることは決まっていますが，まだ教養部の学生です。それで，理学部の全学科の学生が一緒のクラスなんです。当時は40名ですから当然そうかもしれませんが，全部一緒のクラスなんです。だから，ずいぶん考え方も違うし，能力も違う者がたくさんおりました。変わった者がいっぱいおりましたし，理学部に行かずに医学部に行った者もいました。それから，福井出身の浅田君のように，学部に進学してからは中之島の理学部まで阿倍野から2時間ぐらいかかって歩いてきていたものもおりました。

教養部の校舎は南と北にあって，私は南校（大阪大学一般教養部南校）でした。昔の大阪高等学校の校舎で，大阪市阿倍野区北畠にありました。ここの授業は，ほとんど旧制高校の先生がおやりになっていたと思うのですが，旧制高校に比べると著しく大人数のクラスです。これは仕方がないのですが，先生方はそういう授業にあまり慣れておられなかったということもあるかもしれませんが，きめの細かい高校の授業に比べると，少し雑な授業だなという気はしました。

ただ，私自身は，この授業から何かをきっちりと教えてもらうというのではなくて，この授業を通して自分で勉学のきっかけをつかませるという，そういうことに一つの目標というか，基準を置いてやっておられるのかなという気がしました。大学というのは自分で勉強するところだということを教えていただいたのだと思います。しかし，先生方も，少人数でやっておられた授業が，いきなり大人数になって，試験の採点なども大変だったと思います。

採点が大変なので，机の上から答案をばあっと放って，机から着地したところまでの距離を測って，点数をつけるのだという噂も出たほどで，学生のほうも先生方の大変さはよく分かっていたのだと思います。そういう時代でした。

中之島の理学部に行くようになって，様子は大分変わりました。例えば，中川正澄先生，有機化学の先生ですが，この先生の授業はびっくりするほどきっちり準備されていまして，すごい授業だったんです。

ところが，赤堀四郎先生，総長もおやりになった有名な先生ですが，この先生の授業は，黒板に向かって何かをお書きになるのですが，その書いておられることは先生の陰になって学生にはほとんど見えない。そして学生が見るまでに消してしまわれるのです。それからもう一つは声が聞こえないのです。だから，顔を見ているだけというような授業でした。赤堀先生の授業は，むしろ顔を通して感じ取れる先生の人格から何かを得たというような授業でした。非常に親切な先生ですが，授業だけはどうも親切とは言い難かったですね。

それから，浅田常三郎という実験物理学の先生がおられまして，この先生の授業は一所懸命に考えられた面白い授業で，実験も入っていまして，私自身は，この先生から授業の仕方を学んだような気がします。

それから，当時の学生は金がなかったので，私も家庭教師のアルバイトはもちろんやっていましたし，ラジオなどは小学校の時から作っていましたので，これも小遣い稼ぎの種になりました。ラジオは，当時，かなり高い代物でした。それで，日本橋のラジオ屋街に行って部品を買ってきて自分で作ると，市販品の３分の１から４分の１の値段でできるので，それを市販品の半分ぐらいの金額で売っても，かなりのお金が入ってくるのです。そういうこともやっていました。

その時分はどんな時代だったかということを，変な話ですがラジオの面からお話ししてみます。電気蓄音機という言葉をご存じと思いますが，電気蓄音機を作って，そのために日本橋で買ってきたレコードを回すためのモーターを組み込んで，スイッチを入れたら回らないのです。それをラジオ屋に持って行ったら，そこのおやじが店にある在庫品を全部持ってきて回してみましたが，どれもこれも回らない。全部回らないんです。それで，そのおやじさんが，当時の暖房は火鉢ですが，火鉢の上で10分ほど焙りましたら回り出しました。そういう時代でした。これは皆さんご存知の有名なメーカーの製品です。

それから，そこのメーカーが作っている真空管，これはソケットに入るものと入らないものがある。買ってきて入らないものに当たったら，換えに行くわけです。その当時でも，別の会社の真空管は全部入りました。そのころに比べますと，今，日本の工業技術はずいぶん進歩したという気がします。

４年生になると研究室に入るわけですが，この研究室選びは，不純な動機といわれても仕方がないのですが，就職が良いという評判の村橋研究室を選びました。実は，うちのおやじが大学を出たら大学院には行かずに直ぐ就職するようにと言うのです。先ほど言いましたように，農地改革で家の経済状態も決して楽ではない。それともう一つは，伯父の城憲三が，いつも給料が安いことを嘆いていたものですから，おやじは大学の先生では飯は食えないと思い込んでいました。それで，村橋俊介先生のところは非常に就職の世話がいいという評判なので，村橋研究室を選ぶことになったのです。

村橋研究室に入れていただいて，最初に行った研究実験はチーグラー・ナッタ触媒による重合反応です。重合反応というのは小さな分子（モノマー）をたくさん繋いで長い紐のようなポリマー（高分子）と呼ばれる分子を作る反応のことで，皆さんが日頃お使いのプラスチック

製品は全て何かのポリマーからできています。チーグラー・ナッタ触媒というのはドイツ人のチーグラーとイタリア人のナッタがそれぞれ独立に発見した重合反応の触媒で，これを使うと，これまで重合しなかった分子をポリマーにしたり，従来よりは構造の規則性の高い素晴らしい性質のポリマーを作れることが分かって，当時，高分子化学の分野では大きな話題になっていたのです。

研究実験は助手の野桜俊一先生の指導で行いました。触媒を作るのに使う試薬は空気中ではすぐに発火するという物騒な試薬でして，そういう試薬をどのようにして扱うかは，先生も初めてですし，われわれももちろん初めてですから，それまで誰もやったことのないような実験を先生と一緒になってできたということ，これは私にとっては非常にありがたい機会でした。

それからもう一つ，ナッタ先生は，恐ろしくたくさんの実験をやって，どんどん論文を発表されるのです。多いときは週に１報ぐらい書くのです。そうすると，いくら学者でも，それを全て外国語で，つまり英語で書くのは大変ですから，イタリア語の論文が多くなります。こちらは，そのイタリア語を読まざるを得ないということで，『イタリア語四週間』という本を買ってきて，まさに４週間でイタリア語の勉強をして，ナッタの論文を読みました。

これは４年生にとってはかなり大変な仕事でしたが，われわれは戦争中からしんどいことをするのには慣れていますから，何とも思いませんでした。この時はずいぶん勉強をさせていただきましたし，４年生になって，急に大学に入ったという感じがしました。

ところで，阿部先生は，研究室の学生としょっちゅうディスカッションをされますか。

阿部　私ども文科系では理系の研究室と違いまして，週に一度少人数の授業，ゼミがありまして，その場でということになりますから，しょっちゅうというほどではありませんね。大学院生ですと，もう少し頻繁に話をする機会がありますが。

畑田　この時，村橋研究室には，いろいろな事情で，かなりたくさんの先生方がおられました。それで，われわれは村橋先生を「大先生」と呼んでいたのですが，「大の空襲」というのがありました。そのころは，空襲というのは未だ忘れることのできない言葉の一つでしたが，「大の空襲」というのは，村橋研究室の２階には，どういうわけか知りませんが，正規の便所ではない小便所があったんです。それで，村橋先生は小便に行かれる時，あるいはそこから帰ってこられる時に「実験はどうや」と言って実験室に立ち寄られるのです。これは，ほとんど毎日です。小便に行って帰ってこられてから空襲を受けると長い。行く前に空襲を受けた時は早い（笑）。

いずれにしても，これは実験のことを聞かれるのですから，答えられないということはないし，また，村橋先生は実験が進んでいないから怒るというようなことはなかったので，空襲の方は問題なかったのですが，時々「おい，畑田君，これを一寸明日までに読んできてくれ」と言って，分厚い論文を，日本語ならいいのですが，たいてい英語かドイツ語のものを持ってこられる。それをされますと，その日は徹夜になるわけです。徹夜しても，４年生には全部読めないということがあって，その明くる日は恐る恐る先生のところに行って，「大体こんなことが書いてあるようです」と言うと，「そうか」と言っておしまいではあるのですが。

ところが，そのうちにある学生が，論文をそのままため込んで，報告に行かなくても先生は何も言わないということを発見しまして，村橋先生の論文のコピーを大量にため込んだものもいるんです。でも，これもまじめにやっていると，ずいぶん勉強になるし，参考にもなりました。

それで，私は割合まじめにやっていた方だっ

たようですが，そのうちに先生が4年生の私に対して，「俺，こんな文章を書けと言われたから，ちょっと君，下書きを書いてみてくれ」と言われたのです。これも一所懸命にやりました。

ただ，その時に一所懸命やった理由の一つには，非常に不純な動機ですが，ひょっとしたら，その文章のどこかに「畑田君に感謝する」ぐらいは書いてもらえるのかなというのがあったのです。ところが，そういうことは一切ありませんでした。これについては，後で，もう少しお話ししますが，これも一つの勉強でした。

それからもう一つは，今，文献のコピーは非常に簡単にできますが，当時は論文の複写はカメラで撮影するのです。だから，製本してある本だったら大変なんです。誰か一人が紙面が曲がらないように押さえておいて，それをもう一人がカメラで写真に撮る。そして自分でフィルムを現像して印画紙に焼き付ける。だから，20頁もある論文のコピーはかなり大変でした。この論文の複写も4年生の仕事の一つでした。これが写真が私の趣味になった一つの理由です。それで，母親が卒業祝いにカメラを買ってくれることになったのです。

そんなことで，4年生はあっという間に終わりました。

4. 就職，そして大学院へ進学

阿部　先生は理学部をご卒業の後，1957年（昭和32年）に大日本セルロイド株式会社に入社されます。そして，同社に勤務されながら，1958年に大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修士課程に入学されて，この課程を1960年に修了され，1960年には大学院の博士課程に進学されます。さらに1962年に同課程を退学され，1964年3月に大日本セルロイド株式会社退社ということでございます。

このご就職と大学院への進学のいきさつについてお話しください。また，当時のことで印象に残っていることがございましたら，お話しいただきたいと思います。

畑田　はい。卒業に当たって，村橋先生は非常に強く大学院進学を勧められたのですが，家に帰って，それをおやじに言いますと，おやじは反対なのです。非常に強く就職を勧めるわけです。それで，私は家の状況もよく分かりますし，大学院に行けば当然，授業料が要りますから，どうしても企業に就職したいと村橋先生に言いましたら，結局，先生も認めて下さってそれなら大日本セルロイド株式会社（略称ダイセル）に行くのが良いと言われたのです。私はこの先生のお言葉に従い，ダイセルに就職することになったのです。

それで勤務は研究所でした。南海本線の七道という駅の近くに在って，きれいな芝生にレンガ造りの建物という素晴らしいキャンパスでした。ここでは，先ず，ダイセルの主力製品の一つであるアセトアルデヒドの立体規則性重合のグループに配属されました。これは，村橋研究室での仕事を少し発展させたような研究ですが，アセトアルデヒドの用途開発と新規ポリマーの合成が主な目標でした。この研究では，規則性の非常に高いポリマーは出来たのですが，その熱安定性をどうしても向上させることが出来ず，学会誌にいくつかの論文を投稿することは出来たものの，ポリマーの実用化には至りませんでした。

研究所生活が2年目に入る少し前に研究所長の松田さんに呼ばれまして，「畑田君，君は大阪大学大学院の試験を受けるように」と言われたのです。言われたのは，1月の末ぐらいだったと思います。それから，かんかんになって入試の勉強をしまして，何とか通していただきました。口頭試問の時に「畑田君，1年で大分いろいろ忘れたな」と言われましたが（笑），それでも通していただいて，大学院で勉強することになりました。

なぜこんなことになったかと言いますと，こ

れは後で聞いた話ですが，当時の大日本セルロイド株式会社の常務に和田野基さんという方がおられて，この人が村橋先生と懇意で，どこかでお酒を酌み交わしつつ話しておられた時に，和田野さんが「これからの企業は，特に研究所は大学院修了者を少しずつ採用しなければならんと思うのだが」と言われたそうです。日本はそのころ，大学院出身者は会社にほとんどいませんでした。そうしたら村橋先生は即座に「それはそうだ」と言われて，相談のうえ，「畑田君を大学院修士課程の学生として村橋先生のところで勉強させよう」ということになったようです。

それで，給料を頂きながら，授業料も出して頂いて大学院で勉強するという，非常にありがたい身分に変わったわけです。そして，2年たって修士課程を修了する時に，折角だから，これだけ仕事ができたのだから博士課程に進学してはどうかと先生が言われまして，会社でその話をしましたら，それならもう少し頑張ってみるかということになって，そのままドクターに進学しました。2年たった時に「もう1年どうですか」と会社に言ってみたのですが，「いくらなんでもそれはいかん，帰ってこい」ということで会社に帰りました。

修士課程に入学した時の話ですが，村橋先生に「先生，どういう研究をしましょうか」と相談に行きましたら，当時，村橋先生は理学部と産業科学研究所の両方の教授をしておられたのですが，「産業科学研究所の村橋研究室の助手で竜谷文吉君があと1年ほどで博士論文を仕上げて会社に就職することが決まっている。ところが，彼はいま昔の結核の病巣部を取り除く手術で入院することになっている。そのために博士論文が遅れると困るので，君一つ実験に協力してくれないか」と言われたのです。

アセチレンというのは，ご存じだと思いますが，炭素原子二つと水素原子二つからなる構造が，H-C ≡ C-Hの小さい分子です。室温ではガスです。当時は石油化学の盛んな時代で，これを製品の中からどのようにして選択的に取り出すかが大事な問題のひとつだったのです。

竜谷先生はその問題解決の一つの方法として，アセチレンのいろいろな溶媒に対する溶解度を測って，良溶媒の探索をしておられたのです。ガス状のアセチレンが高圧で溶媒の中にいくら溶けるかを測るわけですから，割合難しい実験です。これを竜谷先生が考案された装置を使って，ほぼ1年間やりました。

それで，かなりのデータが得られまして，竜谷先生の博士論文は無事出来上がりました。約1年間，かなり頑張ってデータを出したのですが，これは竜谷先生の論文のためのデータであって，自分の研究成果にはできません。そこで，竜谷さんが入院前に言っておられた，アセチレンが溶媒に溶けるメカニズムを実証してみることを思い立ちました。そのメカニズムというのは「アセチレンをよく溶かす溶媒はジメチルエーテルやジメチルフォルムアミドのように酸素や窒素などの酸性の水素を引きつける力の強い原子をもっている。だから，アセチレンの溶解度はその水素が溶媒中の酸素や窒素の原子にどれくらい引きつけられるかによって決まる」というものです。つまり，その溶媒中の酸素や窒素原子の電子の状態が溶解度を決めているということです。

アセチレンの水素がどれぐらい強く溶媒中の酸素や窒素原子に引きつけられているかは，溶液の赤外スペクトルを測ると分かるのです。ダイセルの研究所でアルデヒドの重合反応を研究していた時には，赤外スペクトルやガスクロマトグラフィーのような分析機器の管理にもある程度関わっていたので，赤外スペクトル測定装置は自由に使えました。アセチレンの溶解度測定をしていた大阪大学産業科学研究所とダイセルの研究所は割合い近いので，アセチレンの溶液を赤外スペクトルの測定セルの中に入れまして，こういうものを公共の交通機関では運べな

いので，事務にお願いして産業科学研究所の所長車を使わせていただいて，ダイセルの研究所まで運んで測定を致しました。結果は事前の予想にぴったりでした。

非常にうれしかったので，これをすぐに英語の論文にしたいと思い，原稿をかなり苦労しながら英語で作成して村橋先生のところに持参しました。村橋先生は，その時は「うん，そうか」と言われただけだったのですが，畑田君よくやったと思ってくださったとみえて，中身を読んだ上で「俺は英語の上手下手はよう分からん。産業科学研究所の守谷一郎先生がアメリカ留学から帰ってきたばかりなので，彼に英語を見てもらうように」と言われました。それで，守谷先生に英語を直していただいて，日本化学会の欧文誌に投稿しましたら，すぐに採用されました。実際に印刷されたのは，修士２年の９月ですが，修士の１年の終わりぐらいの時に英語の論文が一つできたわけです。

それで，アセチレンの溶解度測定の実験が終わり，堺の産業科学研究所から中之島の理学部に帰ってきまして，村橋先生のところに伺いますと，今度は，「実は塩化アリルと言って，チーグラー・ナッタ触媒では重合しそうもないものが重合することが分かった。ところが，それをやっていた修士の学生―僕と同期の学生なのです―が結核で入院した。それで，後を続ける者がいないから，君がやってくれないか」ということになりました。

チーグラー・ナッタ触媒による重合では，ポリマーの原料であるモノマーの炭素―炭素２重結合が開いてポリマーが作られるのです。ところが，塩化アリルから出来たポリマーを赤外スペクトルで調べてみたら，２重結合がかなり残っているのです。それで，ポリマー中の塩素の量を調べてみたら，塩化アリル中の塩素の割合よりもかなり少ないのです。それでこのポリマーは，モノマーの炭素―炭素２重結合が開いて出来たものではなくて，触媒を作る時に副生する塩素とアルミニウムの結合を含む化合物が触媒となって，モノマー分子とモノマー分子の間から塩化水素が脱離して分子同士がつながって出来ていることが明らかになりました。試しに，塩化アリルを塩化アルミニウムで処理してみたら同じようなポリマーが出来ました。この研究結果を英語で論文にするのには，修士１年の時の経験が大いに役に立ちました。

このようにして，私は，研究というものはどんなふうに進めるのが良いのか，その成果をどのようにして論文にまとめるのか，をいろいろな先生の助けを受けながら，自分で学ぶことが出来ました。その動機を村橋先生は上手に与えていただいたと思っています。村橋先生が博士課程に進んではどうかと言って下さったのは，私の成果をある程度評価していただいたのでしょう。最初，私が若干不満に思っていた村橋先生のやり方も，実は私のことを考えてやっていただいていたのだということが，少しずつ分かるようになりました。

ここで，若い人にひとこと言っておくとすれば，上司のやり方に不満を感じたときは，すぐに文句を言わずに，せめて２年待ってみては，ということです。上司の心は，そう簡単に分かるものではありません。でも，こういうやり方が全て正しいというわけでもないので，難しいところではありますが。

畑田耕一名誉教授略歴

1934年12月　大阪府に生まれる
1953年４月　大阪大学理学部化学科入学
1957年３月　大阪大学理学部化学科卒業
1957年４月　大日本セルロイド株式会社入社
1958年４月　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修士課程入学
1960年３月　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修士課程修了
1960年４月　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士課程入学

1962 年 3 月　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士課程退学
1964 年 3 月　大日本セルロイド株式会社退社
1964 年 4 月　大阪大学助手基礎工学部
1965 年 3 月　理学博士（大阪大学）
1967 年 4 月　大阪大学助教授基礎工学部
1983 年 4 月　大阪大学教授基礎工学部
1990 年 4 月　大阪大学評議員（1992年3月まで）
1991 年 4 月　大阪大学有機工学研究センター長（1993 年 3 月まで）
1994 年 4 月　大阪大学基礎工学部長（1996 年 3 月まで）
1997 年 4 月　大阪大学先導的研究オープンセンター長（1998 年 3 月まで）
大阪大学教授大学院基礎工学研究科
大阪大学副学長（1998年3月まで）
大阪大学全学共通教育機構長（1998 年 3 月まで）
1998 年 3 月　大阪大学停年退職
1998 年 4 月　大阪大学名誉教授
福井工業大学教授（2007 年 3 月まで）
2008 年 7 月　国際ロータリー第 2660 地区職業奉仕委員長（2009 年 6 月まで）
2009 年 7 月　国際ロータリー第 2660 地区研修委員
2005 年 4 月　大阪府登録文化財所有者の会会長
畑田家住宅活用保存会事務局長

Memoir of Osaka University talked by Professor Emeritus Koichi Hatada (1)

Masaki Kan and Takeshi Abe

This is a record of the talk of Professor Emeritus Koichi Hatada related to the history of Osaka University. Professor Hatada, who was born in 1934, had been interested in natural science since he was a pupil of a primary school. He entered the Faculty of Science at Osaka University in 1953, and studied high polymer chemistry under the supervision of Professor Shunsuke Murahashi. Graduating there in 1957, Professor Hatada came to work at the Sakai Laboratory of Dai Nippon Celluloid Co., a large chemical company. However, the company generously permitted him to study at the Graduate School of Science at Osaka University, and he passed its entrance examination. Then Professor Hatada again started to study polymer chemistry with Professor Murahashi in 1958, continuing to work for Dai Nippon Celluloid Co.